

三月作品

月集スバル

☆今月の四人☆ (桑原正紀選)

ひとつ面影

水島 晴子 兵庫

新発田市の駅弁当をいただきてひとつ面影胸に甦りぬ
隔意なき言葉やさしく問ひかけて岡崎康行氏ほほゑみのひと
上背のありし君ゆゑあたたかきころは降りきわが額の辺に
南天の朱き珠実たまごに吹き寄せてしまく風見ゆ渡り廊より
花かさね円き蕾もかさね合ふ山茶花垣に冬ひかり透く

ほんとうは

大松 達知*東京

泣きそうになったと言つてほんとうは泣いていたこと僕だけが知る
当たり障りない会話して夫婦あり 当たりも障りもない遠い星
ひとりごとをひとり訂正していたり とんちんかんは土地勘に似て
電話してよろしいですかLINEきてありますがどうございましたLINEくる
よろしく頼む、おじさん風に言つてみる僕を必要としない海に向かつて

らしくていいね

津金 規雄 神奈川

青桐の葉の散りたまる公園に風吹けば鳴るその音ゴージャス
はんなりと美男かづらは赤き実を和菓子京鹿子のさまに垂らせる
四十雀、山雀、小啄こづつ木鳥こづつ、柄長らの混群は過ぐ冬木のこずゑ
せきれいは黒の前掛けあざやかに櫓田をゆく一足ひとあし
かたまりて咲くとき小菊はみづからの生うゑを主張せり らしくていいね

潮にほふ

藤野 早苗 福岡

六十で娘と呼ばれる幸ひが令和四年の今もあること
足萎えて外出できずなりしより海馬がいつも眠い母なり
ドライブがかかつたやうなレスポンス得意なりしよ若き日の母
カーナビの確かならねば潮にほふ方へ方へと夜を走れり
報じられないのは無いのと同じこと ワールド杯カップの画面の向かう

☆

☆



奥村晃作* 東京

外塚喬の『象の眼』評を本格的〈奥村晃作論〉として読む

『象の眼』に至って〈オクムラコウサクの短歌世界〉が見えた」と記す
『象の眼』が出てやつとこさオクムラの歌の世界が見えて来たかと
「秀歌なぞ見向きもしないオクムラの歌の世界」と外塚書けり
「もしかして全作品が秀歌かも」外塚喬はそうも書いてた

武田弘之 神奈川

森重香代子 山口

逝く歳はいくつにならん九十を過ぎて九十一の間近し
柀二忌を過ぎて母の忌近づくと師走の日々をつつしみ過ごす
公彦の生まれ日に次ぎ柀二忌のありて繋がる歌の縁は
プーチンの侵攻、コロナ禍の止まぬ日々なり歌に魅せられて生く
編集の努力を偲び読みゆくに楽しコスモス新年号は

訳を告ぐる賢き歌の多けれどしみじみ嘆くうたは稀なり
仄めくといふ詞など八十年一度も使ひしことのあらざり
一度も勤めといふをせざりしと米の祝の近き日おもふ
昨日より老のすすみしわが面輪写してをりぬ朝の鏡は
わが門にむかし枯れたる松の木を言ひいづるかな老いし庭師の

高野公彦 千葉

日影康子 富山

少年の宮肇みし町を来て家並に時に廢屋混じる
コロナ禍で梁廢されし魚野川梁なき跡を清き水ゆく
髯白き師を偲びつつ根小屋橋に立てば四方に山紅葉見ゆ
〔緑川〕飲みて越後の旅を終へ家にて〔越乃雪藏〕を飲む
白秋逝き柀二逝き、そして驍二逝きいづれ我も逝き（うた）は生き繼ぐ

本堂の大屋根の下に通り返けのトンネル生まれ雪の日近し
雪しまく師走の空にそびえ立つ本堂へむかひて合掌したり
合掌は感動の表現と両の掌を合はせてひとり恩徳讀うたふ
寺奥の日々の寂しさ言ふわれに「ひとみなひとり」と息子は応ふ
寝る前のベッドに腰かけ漢字パズル楽しみし後を何故か眠れず

影山 一男 千葉

宮里 信輝 神奈川

42

コロナ禍の小さな小さな忘年会古い人三人お茶で乾杯
将来のこと考へられず考へず七十年代無頼派気取り
受けし恩滴々と身に沁み入りて来嶋靖生さんお訣れ申す
原発をまた推めゆく論ありて章魚が己れの足食ふ日本
晩年の次に来るもの怖れつつ水欲りて覚む暁の四時過ぎ

桑原 正紀 東京

小島 ゆかり 東京

コンビニのレジの数字の四桁が全部そろひて「おっ」と声あく
店員も驚きほがらかに告げぬ「三千三百三十三円です！」
レシートに「3333」と並ぶを蔵ふ内ポケットに
ベトナムに「3333」といふビールありてめでたき意味を持つらし
大き幸など要らなくて小さき幸いくつかあれば生きていけるさ

狩野 一男 東京

木畑 紀子 京都

どつちみちいづれにしてもわが生の残り時間はかぞへられない
強大な国と隣接する国と、凄いいミサイル、強いミサイル
うつせみの命老いつつ戦争と平和についてしばしば思ふ
さざんくわの十二月なり覚悟して自分の歌を詠ひてゆかむ
癸卯二〇二三年七十二、世界は日本はどう動くのか

不可思議のアンモナイトの渦に触る われらの「銀河系」も渦巻き
手触れゐて偲べり四億年栄えほろびしアンモナイトの恋を
大気圏をつくり地球は羽包めりわれら生物を太陽光から
太陽は核融合炉 大気圏のそとに出づれば放射線の雨
アメシスト、オパール、翡翠、ダイヤモンド、ルビー 地球は生めり美石も
冬日和けふは他界の人めきてワクチン打ちしからだを運ぶ
いつの世の少年僧か群鳩におくれて蒼き一羽あゆめり
起きぬけの身は濛々と白毛のけもののごとし冬のあけほの
たまに来て老化を競ふ旧友のグループLINE 綿のはな咲く
モノレールの車窓より見るゆふやみの品川埠頭ちちはは遠し
わがうたのふるさとして「コスモス」の友垣のゐる東京を恋ふ
遠山のもみぢ浜名湖やがて富士車窓なつかしき東京行なり
コロナ禍のあひだに鄙の婆となりをのく新宿駅の人混み
このたびは墓参はぶけど新宿の虚無僧寺にねむるちはは
余所者のわれは「東京の子やねん」と義姉にいはいはれき五十年まへ

島田 暉 神奈川

空爆後家々あまた焼け落ちて地獄のやうに暮れゆく都会
火柱を負ひて逃げゆく人あまた焼土のはての赤き地獄へ
空襲のたびごとと逃ぐる孤児となり戦争にくむ鬼になりゆく
空襲後死体の山を積みし寺ラジオは流す日本は勝つと
炎負ひただに逃げゆく少年ら戦後生き継ぐ老人われら

田宮 朋子 新潟

曲線の美^はしき白磁の壺焼きし秋野等氏世を去りたまふ
長火鉢に熾る炭火をながめつつ夫の淹れくるる朝の茶を待つ
秋野等作の白磁の茶碗へとひすいの色の緑茶が注がる
若き日の秋野等の大きくて温かい手がつくりし茶碗
日照雨^{そばへ}やむ枯れ草原の露しづく尽十方にひかり満ちたり

小山 富紀子 京都

ピアニストもバレリーナも戦場で今宵交はずか「メリークリスマス」
神仏は日本の闇にましまして何を思すや聖夜ふけゆく
国連があれば世界は大丈夫さう教はりき小学生われ
一心に祈れば地には平和来る信じて祈りき女学生われ

「戦」の字が今年の漢字に選ばれぬ宜なるかなと思ふかなしさ

清水 正子 神奈川

弦楽器ウードの弾む調べよしカターLW杯これぞサッカー
琵琶に似るアラブのウード今日も聞き読みたくなりぬ千夜一夜を
ファンタジスタゐない日本の頑張りよ勝利の呪文唱へて見をり
赤と白の市松模様様のユニホーム粋なクロアチアはお江戸でござる
真夜中のテレビ観戦ゆるくない神の子メッシの国が勝ちたり

小嶋 一郎 佐賀

外出の一日閉ぢ込めぬし蜂を情状を以て窓より放つ
この老いを尻目に若き二人連れ駆け込む「青」の点滅を見て
急ぐこと不要なること知りながら尻らに抜かれてのちの早足
出会^{でくは}せる懐中電灯はわが顔を瞬時に照らし言もなく過ぐ
ポストまで三分なりし道程^{みちのり}が五分かかりて変らぬ一〇〇〇歩

後藤 美子 北海道

〈老衰で没〉とありても不思議なし九十歳近き夫婦となりぬ
四ヶ月夫と同じき米寿なりき茫々と長し共にせし日々
ビールあげ初めての店に寿司をたのみ夫の誕生日ささやかに祝ふ
古びたる膝なだめつつ両の手に力をこめて市電に乗り込む

去年よりもドカ雪の多き冬来むか備へよと言ふ小春日の午後

白鳥のエサやり禁止の看板の真新しきが川べりに立つ
陽性の五羽もろとも百三十七万の鶏トリうづめられたり

十二月の土の冷たさ「殺処分」と「処分」いづれが酷き言葉か
ニワトリの保護訴ふる活動家 名画に卵を投げつけるため
新米の「あさゆき」炊げり土鍋よりひとすぢの湯気たちのほらせて

百五十六人が死ぬ梨泰院イテウゼンの路地坂「群衆雪崩」の起きて

駐車場にいまはしづかに停まりゐるくるまいよいよといふ時を待つ
広辞苑電子版にて「拭しよく」一字引きたれば「拭ぬい布ぬの」などが出る
「のこい」引けば「のこいぬ」あり「のこいぬ」引けば「てぬぐい」のことありたり
旺文社古語辞典にて「のこう」引くに「野飼のがふ」「拭ぬふ」のふたつ出でくる

あしあとはひとつもなく乾きたる落葉ばかりの生まれ家の庭
まひるまの冬の陽ぬくし チンチンをしてはつちちゃんかほちやゆつくりと切る
ゆくゆくは四人たのしく暮らしませうあなた似のイヌとわたし似のネコと
パーカーをはおり思へり裏起毛を「裏、起毛」と言ひてゐし友
よこはばと甲の高さが足りなくて長さが余る通販のくつ

男らは金閣を焼き母殺し手製の銃で元首相殺しぬ
とりかへし出来ざる命を生きてきぬ金閣焼きし養賢もわれも
金閣のかがやく金はいかな蜜アリのごとくに人らわれくる
形而下の金閣は再建はたせども養賢の母の命もどらぬ
再建の金閣げばしと里がへりの母に語りゐき京都の祖母は
鮫だまし狸だまして充血のまなこにしんと目薬を注す
てふてふは蝶に生まれて白い服われは臙脂の真冬のコート
こめかみにぐつと力を入れないと覚えた名まへ忘れてしまふ
もしわれが徘徊ハイハイになつたなら指に唾つけ風を読まうよ
目を閉ちてゐるのに青空まぶしくて奈落の目抜き通りを行けり
この世にはさほどよきことなからむに鴉はけさもゴミ出しを待つ
朝よりビニール袋をつつきゐる鴉に慰労のことばはかけぬ
ちらかすが得意な鴉の放埒は五十年前の下宿をおもはず
たまり場となりたるKの六畳間夜は大方議論か麻雀
理学部のKのささやかな本箱に現代詩手帖なぜか並びぬ

原賀 瓊子 東京

吾亦紅すべてにきみは慎ましく苑のはしつこ広辞苑でも

ベビー服着た古着屋の人形よ行くといふゆゑつれて帰りぬ

買ふといふことではないの人形はただわが元へ来てくれるひと

暗がりのくすのき大樹みあげてはレイトシネマゆ帰る夜ありき

父を忘れ柎二わすれつ わが父と柎二の忌日きのふと気づき

水上 芙季 神奈川

みかん一つバッグにしのはせ出勤す年末まではけつきよく遠い

印刷ボタン押しでは取りに行く作業からだはくるくる電話コードだ

ポーンがびめうに下がりテンションはしつかり下がる金曜の午後

厨には「これでいいんだ！ 自炊ごはん」ありて夫が何か煮てゐる

じわじわと料理の腕を上げた夫「青菜とひき肉のサゲカレ鍋」作る

大野 英子 福岡

不都合はいゑんに墓のなかなかの付度をする墓守多く

言はせたいことを引き出す自民党同士の質疑は茶番のじかん

「自助」ありて「国民の責任」上空の旅客機が厚き雲に消えゆく

入港する船と過ぎゆく旅客機の音かさなりてのちの風音

波多江といふ苗字の由来を思ひひる波多江さん多きここ港町

松尾 祥子 東京

母乳とうに洒れはてたれど粉ミルク赤子に飲まず冬陽射す部屋
両拳にぎりウンチをふんばりて真つ赤つかつか三キロのからだ
桐箱のなくてガーゼに乾かせりぼろり取れたる孫のへその緒
生きてゐて良かつたとわがこゑに出づ新米の握り飯を食む朝
やらなければならぬことあまたあるなれとやらねばならぬことなどなくて

奥村晃作歌集 令和4年7月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

象の眼 コスモス叢書第1213篇 六花書林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七一―一五―一六

鈴木竹志歌集 令和4年6月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

聴雨 コスモス叢書第1211篇 六花書林

著者住所 〒448-0047 愛知県刈谷市高津波町三―四〇八